

中学校 1 年生 一般動詞導入時の工夫

Some ideas for making students understand different usages of be-verbs and general verbs

兼子 真季

東京都文京区立本郷台中学校

Abstract

It is often difficult for junior high school students to discriminate the usages of be-verbs from general verbs. In this report, I want to show my classroom practice to assist students' understanding in composing basic sentences. The contrastive images of be-verbs and general verbs are introduced as a racing car and a school bus in terms of their traffic regulations. As in the case of each traffic regulation for a racing car and a school bus, the usages of be-verbs and general verbs are also differed. Assuming the grammatical usages of each verb as traffic regulations, students would acquire proper perception on comprehensive grammatical composing. This report suggests that using familiar objects or events to students' daily life may help the students understand the functions of difficult grammatical features necessary to English composition, and it can encourage their interests.

キーワード： 一般動詞、be 動詞、中学校英語教育、少人数授業

科目名	英語
対象者とクラス人数	中学 1 年、少人数基礎クラス 20 人前後（学期により変動あり）
学習の目標	初歩的な英語表現を身につけ、英語を用いて身の回りのことを相手に伝えることのできる力を養う。

1. はじめに

本実践報告は、中学校 1 年生時において be 動詞導入後に、一般動詞を導入する際に見られる生徒の混乱をいかに減らし、負担を減らしながら英語の文構成の理解を助けることができなかつたの視点から考え出した指導工夫である。習熟度別少人数基礎クラスの生徒は、中学 1 年時の be 動詞導入直後から英語に対する苦手意識が高く、英語学習に対してあきらめを抱いている生徒が多く見受けられる。そんな生徒達に英語をいつもと異なる視点から捉えさせ、文法を文法のまま教えるのではなく、身近なものにたとえながら理解を深めさせていくことができたらと考えた実践が以下の報告である。

2. 工夫

以下 2.1 のように、be 動詞、一般動詞それぞれに車のイメージを与えて導入することができる。基礎クラスの中には、一般動詞を用いる英文中に無意識のうちに be 動詞を入れてしまう生徒、なぜ be 動詞を入れてはいけないのか捉えられない生徒が多い。そんなときに、それぞれの動詞には役割があり、英文という車線の中には走行規則があるというイメージで導入した。そのことから英文法という生徒たちから見て難しそうな存在のものではなく、身の回りの交通規則をイメージしながら英語を理解し、be 動詞、一般動詞の走行規則を当てはめながら初歩的な正しい英文を書くことのできる一助となることを期待し提示している。

2.1 be 動詞と一般動詞のイメージとそれぞれの役割(走行ルール)

(1) be 動詞は小回りのきくレーサーのイメージで

- ① be 動詞はあちこち動きまわれる 疑問文を作るときは前へ。
- ② be 動詞は面倒くさがりではない not とも友達になれる。



(2) 一般動詞はおしりの重い大型バスのイメージで

- ① おしりが重いので動き回れない 疑問文・否定文の時は Do と Does が頼み。
- ② 唯一やってくれることは主語が she / he / it の時に(e)s をつけてくれること。

- (3) be 動詞（レーサー）と一般動詞（大型バス）は共存できないというルール
- ① 1つの英文には一台の車しか走ることはできない。（一車線である）
 - ② 共存させたいのなら、どちらかが形を変えること。（1年生では進行形の時など）
→ 変えさせられたほうが、変わらないほうの走行ルールに従う。

2.2 一般動詞導入後に助動詞 can を導入する際のイメージ

- (4) can の場合 can は救急車のイメージで
- ① 一旦すべての車（be 動詞、一般動詞）は一時停止 → すべての動詞は原型（振り出し）に戻る。
 - ② 救急車だから何でもやってくれる → 疑問文・否定文もお任せ。
 - ③ 救急車だから誰でも乗せられる → 主語を選ばない（オールマイティ）。

3. おわりに

1年次に be 動詞と一般動詞の基本的な使い方を理解できた生徒は、その後に現在進行形や助動詞 can を導入しても混乱が小さく、理解が安定していることがここ数年の生徒の様子から伺える。また学年が上がり、受け身や現在完了を学習した際も、2.1 (3) にあるような動詞共存の際のルールを応用し、形を変えない方のルールに従うという英文の基本的な動きを捉えることができ自発的に理解している生徒が多い。

本稿は英語に苦手意識を持つ中学校1年生に対し、いかに易しい表現で be 動詞と一般動詞の使い方の違いを理解させ、英文を書く際に間違いがないか自身で確認させられるかを目的とした指導方法であった。生徒は黒板に貼られたレーサーカーと大型バスの絵に何が始まるのだろうという表情でそれぞれの車（動詞）の特徴を捉えていくことができた。実際に厚紙に絵を貼り、視覚的に黒板に書かれた英文の上でその車を動かすことで理解は深まり、文字に頼るだけでなく車の絵の活用も効果があると感じている。

現在多くの中学校で習熟度別の授業が行われている。その中で基礎クラスを担当するということは生徒のほとんどが英語嫌いや英語に対して苦手意識を持っている、そのような生徒集団を相手に授業を行っていくことは大変な苦勞である。しかし、そんな中で試行錯誤しながら少しでも生徒に分るように、飽きさせないようにと考え工夫していくことは教師にとっても自身の指導方法の改善や指導対象の幅を広げる機会になると感じている。